

2025

7.2 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_E-w7GM6XTYCNFpeaNm5YVA

【技術支援】九州大学 Q-AOS

地域資源を活かした フードビジネスの可能性



Key Words

産官学連携

地域資源

陸上養殖

サーキュラーエコノミー

フードテック

農福連携

木附 誠一 教授

未来社会デザイン統括本部



1990 年に京都大学農学部卒業後、日本工営(株)にて海外農業開発プロジェクト(ODA 関連)、国内の農業農村整備事業等に従事しました。

1997 年より(株)三菱総合研究所にて、食料問題、農村振興・地域活性化、食品流通、食品表示適正化、6次産業化、アグリビジネス、フードテック等に係る施策立案、調査・研究、制度設計、実証事業のほか、民間企業のコンサルティング業務、スタートアップとの連携・共創・事業支援などの業務を担当してきました。

兼職として、九州大学 未来社会デザイン統括本部 ディレクター・客員教授のほか、千葉大学 大学院園芸学研究院 客員教授、新潟食料農業大学 客員教授なども併任しています。

気候変動、人口増加、各地での紛争など、地球規模のさまざまな課題が深刻化する中、それに起因する「食」をめぐる社会的課題も顕在化しています。こうした状況において、地域農業や地域コミュニティのあり方があらためて問われています。今、地域に求められているのは、多様な地域資源を活かしながら社会課題を解決するための、持続可能な仕組みやビジネスモデルの構築です。個々の企業や団体だけでは対応が難しい課題に対しては、産官学連携をはじめとする多様なステークホルダーの協働が不可欠です。さらに、サイエンスやテクノロジーの力に加えて、風土や地域コミュニティといった社会的・文化的要素を取り入れることにより、地域資源の価値を最大限に引き出し、持続可能な事業の展開が期待されます。本セミナーでは、こうした地域の取り組みにおいて重要となる視点や事業展開の方向性について、具体的な事例を交えながら共有します。

2025

7.9 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

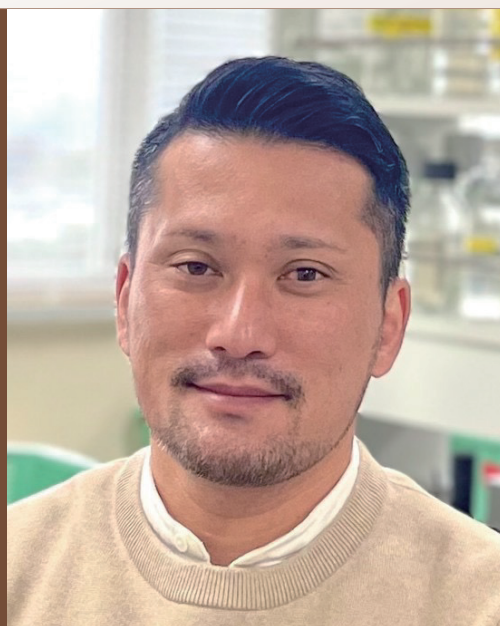
オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_M9FUzFcDQFWYq3SaYRqHCg

【技術支援】九州大学 Q-AOS

ピロリ菌と歩む世界の尾根



Key Words

ヘリコバクター・ピロリ

ブータン

感染症対策

細菌ゲノム解析

ユニバーサルヘルスカバレッジ

松本 昂 助教

大分大学医学部 環境・予防医学講座

大分県別府市出身。2011年、大分大学大学院医学系研究科微生物学講座において博士（医学）の学位を取得。同年、同講座の助教に着任し、狂犬病ウイルスに対するモノクローナル抗体の樹立および性状解析、ならびにアジア地域における狂犬病および小児ウイルス性下痢症に関する疫学研究に従事しました。2015年より大分大学医学部環境・予防医学講座の助教として、ヘリコバクター・ピロリのゲノム疫学を中心とした国際共同研究に取り組んでいます。2025年4月からは、同大学グローバル感染症研究センター・ゲノムワイド感染症研究部門を兼務。

現在、主に以下の国際共同研究プロジェクトに参加しています：

1. JICA-AMED 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) 「ピロリ菌感染症関連死撲滅に向けた中核拠点形成事業」
2. JSPS 研究拠点形成事業「アフリカにおけるピロリ菌およびマイクロバイオータ研究拠点形成」
3. AMED 先端国際共同研究推進プログラム (ASPIRE-B) 「発癌病原体ヘリコバクター・ピロリに対する免疫応答の理解と免疫療法への応用」

ピロリ菌は、世界人口の約半数が感染していると推定されています。この菌は、胃酸が産生される過酷な胃の環境でも生存し、萎縮性胃炎や十二指腸潰瘍、さらに胃癌など深刻な疾患を引き起こします。しかし、実際には無症状もしくは軽症のまま生涯を終える感染者も多く、胃癌を発症するのは数%に過ぎません。

本セミナーでは、胃癌発症に関わる因子、アジア地域で胃癌患者が多い理由、感染による胃内の環境変化、人類とピロリ菌の歴史といった幅広い疑問に関して、ピロリ菌のゲノム解析から明らかになった最新の知見をお話しします。さらに、ブータンでのピロリ菌感染症や胃癌に対する我々の取り組みについてもご紹介します。

2025

7.16 (水) 12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_5bJKpuI_TP-QXxVBOo29eA

【技術支援】九州大学 Q-AOS

データ正義： ビジネス中心から人間中心のアプローチへ



Key Words

情報法

個人データ

AI

所有権

GDPR

フェニック マーク 教授

法学研究院 国際関係法学部門

フェニック マークは、イギリスのリーズで生まれました。現在は九州大学大学院法学研究院において、国際ビジネス法の教授を務めています。彼の主な研究分野は、デジタル時代におけるビジネス規制および法と社会理論です。著書・編著書は 20 冊以上、法学雑誌に掲載された論文は 50 本を超え、これまでに EU、OECD、世界銀行のための研究も行ってきました。ケンブリッジ大学法学部（クイーンズ・カレッジ）で修士号および博士号を取得しています。これまでに、ケンブリッジ大学、デューク大学、香港大学、上海財経大学、シンガポール国立大学、チュラロンコン大学、ティルブルフ大学で客員教授を務めた経験もあります。

個人データは現代経済の原動力です。私たちがオンラインでもオフラインでも何か行動するたびにデータが生まれ、それを企業が常に収集・活用しています。多くの場合、私たちが気づかないうちに、その情報は金に換えられています。そしてそのデータは、人々を分類し、操作し、排除するために使われています——十分な説明や同意なしに。

EU の GDPR やカリフォルニア州の CCPA と CPRA のようなプライバシー法も、期待されたほどの効果は出ていません。この講演では、人を中心に据えた新しいアプローチを提案します。個人が自分のデータを本当に「所有」し、どう使われるかを自分で決められるようにする考え方です。AI 技術もこのビジョンの実現に貢献できますが、それは企業の利益ではなく、人間の尊厳と自律性を最優先する強力なルールに支えられていることが前提です。

2025

7.23 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆発表者紹介

12:15-12:40

◆プレゼン

12:40-12:50

◆質疑応答

オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_aANPC2UFQZiCT3jDjCrpAg

【技術支援】九州大学 Q-AOS

安全と健康を着る

- スマート衣服を活用した体調評価指標の開発 -



Key Words

ウェルネス

実世界データ

健康情報学

ウェアラブル生体センサ

金子 美樹 准教授

システム情報科学研究院 情報学部門 / システム生命科学府

九州大学大学院システム生命科学府で博士号を取得。2016 年、東京大学大学院工学系研究科でAMED プロジェクトの特任研究員として、磁気トレーサー粒子を用いたセンチネルリンパ節生検技術の開発やがん転移の迅速診断のための自動磁気免疫染色装置の開発に従事していました。2018 年、大阪大学大学院基礎工学研究科の助教に着任。現在は実世界環境下における生体情報から体調や疾患を評価する手法の開発、ウェアラブルデバイスを用いた健康リスクの評価に関する研究を行っています。

多くの女性が更年期障害や月経前症候群に伴う心身の不調を経験したことがあると思います。このような女性ならではの健康問題は、下腹部痛、吐き気、頭痛といった身体的・精神的症状を引き起こすため、日々の幸福感、仕事へのストレス、仕事のパフォーマンスに影響を与える可能性があります。しかし、こうした問題に対する社会的な認識は低く、女性労働者に対する効果的な健康支援体制は未だ十分に確立されていません。本セミナーでは、スマートウェアとウェアラブル生体センサを活用した健康モニタリングシステムと、新たな健康評価指標について紹介し、女性の健康問題をはじめとした実世界環境における様々な健康問題への支援方法を共有します。

2025

7.30 (水)

12:10
12:50

12:10-12:15

◆ 演者紹介

12:15-12:40

◆ プレゼン

12:40-12:50

◆ 質疑応答

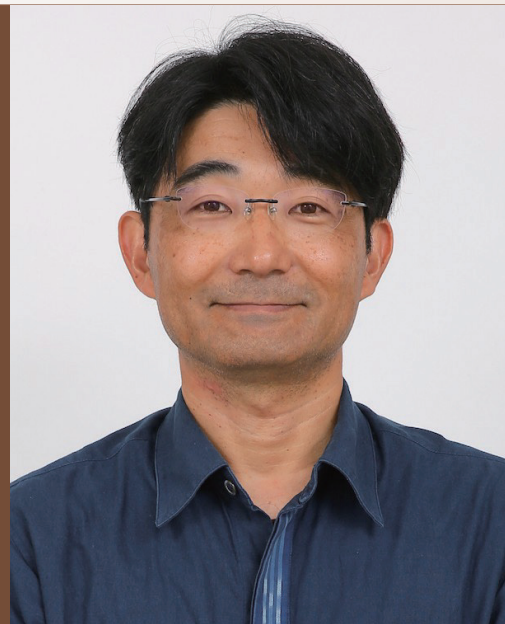
オンライン
(Zoom)

登録はこちら▶▶

https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_1MgcUCf4TTu8VjjDqyzNEA

【技術支援】九州大学 Q-AOS

生物多様性と多種共存： 研究教育拠点としての天草臨海実験所



Key Words

沿岸生態系

海洋生物

魚類

ベントス

サンゴ

生態学

生物群集

潮間帯

新垣 誠司 准教授

理学部附属天草臨海実験所

沖縄県内の高校を卒業後、海洋生物学を学ぶため九州大学理学部へ進学しました。学部4年生から博士課程まで理学部附属天草臨海実験所で研究に取り組み、2006年に潮間帯魚類の共存機構に関するテーマで博士号を取得しました。その後、九州大学大学院理学研究院、琉球大学大学院理工学研究科、水産総合研究センター（現：水産研究・教育機構）西海区水産研究所石垣支所、琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験施設での勤務を経て、2011年に九州大学大学院理学研究院に着任し、天草臨海実験所を拠点として教育研究に従事しています。専門は海洋生態学で、特に群集生態学の視点から生物多様性や多種共存について研究しています。

生物は地球上に遍在（広く分布）します。一方で、多くの生物が特定の場所や時間に集中するなど、“偏在”しており、生物群集の示すパターンは多様です。「複数の生物種がどのように共存し、群集構造を形成し、存続しているのか」という問いに答えるため、生物多様性の高い地域として知られる、アジアの温帯から熱帯域にかけての沿岸浅海域でフィールドベースの研究に取り組んでいます。本セミナーでは、その研究例と活動拠点である天草臨海実験所の紹介をします。